
曲目解説

●演奏曲目の作曲者について

○フランツ・イグナーツ・ダンツィ (Franz Ignaz Danzi, 1763 - 1826) はドイツ生まれ。若いころにモーツァルトに出会って生涯尊敬し、ベートーヴェンとは異なる作風を保ち、後にはウェーバーの指導をしています。

木管五重奏曲は9曲書いています。

作品56 (3曲)、作品67 (3曲)、作品68 (3曲)

○アントニン・ライヒャ (Antonín Rejcha 1770 - 1836) はチェコ生まれですが、ドイツ、フランスで活躍。ベートーヴェンと同年生まれで、ベートーヴェンとの関係もあります。

1785年、ケルン選帝侯マクシミリアンの宮廷楽団のフルート奏者としてボンに移り、同じ楽団でヴィオラ奏者だったベートーヴェンと知り合う。

1789年、ベートーヴェンとともにボン大学に入学。

1801年、ウイーンに移り、ベートーヴェンと再会。

木管五重奏曲を24曲も書いています。

作品88 (6曲、1817)、作品91 (6曲、1818)、作品99 (6曲、1819)、作品100 (6曲、1820)

○マルタン=ジョゼフ・メンガル (Martin Joseph Mengal 1784-1851)

ベルギーの作曲家。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ロッシェニなどの作曲家たちのパロディ作品を多く作曲しています。

★パロディとは他の作者によって創作された文学や音楽、美術、演説などを模倣した作品、あるいは作り替える行為そのものを指します。日本で普通使われているようにユーモア、皮肉などを含んでいるという意味合いは全くありません。

例としてルネサンスの作曲家パレストリーナ (1525 - 1594) には50曲以上のパロディ・ミサがあります。これらは当時流行していたモテットやシャンソンの旋律を借用して作曲されたごく真面目な宗教音楽で、面白おかしいとは全く正反対の雰囲気音楽です。

○ジョアキーノ・アントーニオ・ロッシェニ (Gioachino Antonio Rossini, 1792 - 1868) は、イタリアの作曲家。

1810年、1820年代ではベートーヴェンなどを押しつけて、ヨーロッパの音楽界で随一の人気を誇っていました。1829年、37歳の時に書いた最後のオペラ『ウィリアム・テル』を最後に作曲界からほぼ引退。それまでに稼いだ大金を手に悠々と余生を送ったことで有名です。料理にも関心が高く、“牛ヒレ肉のロッシェニ風”などという料理名にも名前が残っています。

●曲目解説

○ロッシーニ - メンガル編：木管五重奏曲へ長調

ロッシーニの作品を基にしたメンガルのパロディ曲と思われます。原曲として考えられるものとして ロッシーニ作曲の6曲の木管四重奏 (Fl, Cl, Fg, Hr) のための曲がありますが、その中にはへ長調の曲はありません。

○ライヒャ　：木管五重奏曲　変ホ長調　作品88-2（1817年）

第1楽章	Lento Allegro moderato	4 / 4 拍子	変ホ長調
第2楽章	Scherzo Allegro	3 / 4 拍子	変ホ長調
第3楽章	Andante grazioso	2 / 4 拍子	変ロ長調
第4楽章	Finale Allegro molto	6 / 8 拍子	変ホ長調

休憩

○ライヒャ　：コールアングレと木管四重奏のためのアダージョ　ニ短調

通常の木管五重奏の編成の中のオーボエをコールアングレに変えた編成による曲。

コールアングレは普通のオーボエより5度低い大型の楽器で、イングリッシュホルンと呼ばれることもあります。ドボルザークの新世界交響曲の第2楽章でイングリッシュホルンの吹く旋律が“家路”として有名です。

表紙の写真で左から2人目の三宮さんが持っている曲がった楽器がコールアングレの古楽器だと思われます。古くはオーボエ・ダ・カッチャと呼ばれていました。（カッチャはイタリア語で狩りのことで、狩りの際にホルンのようにベルを後ろに向けて吹いていたようです。）

上が現代のオーボエ、下が現代のコールアングレ



○ダンツィ　：木管五重奏曲　変ロ長調　作品56-1

第1楽章	Allegretto	4 / 4 拍子	変ロ長調
第2楽章	Andante con moto	4 / 4 拍子	ニ短調
第3楽章	Menuetto Allegretto	3 / 4 拍子	変ロ長調
第4楽章	Allegro	6 / 8 拍子	変ロ長調